

平成8年 **3月23日(土)** ~ **5月12日(日)**

出土品展
狭山の縄文時代



狭山市立博物館

開催にあたって

最近、埋蔵文化財の発掘調査についての話題が、新聞・テレビやラジオなどでよく取り上げられ、市民の文化財に対する関心が高まり、埋蔵文化財の情報は、考古学者ら専門家だけのものではなく、つづつあるようです。現在全国各地で進められている多くの発掘調査によって、地中に埋もれた文化や歴史が今、明らかにされてきています。特に、縄文時代については、青森県の大規模遺跡「三内丸山遺跡」の発掘成果から、これまで考えられてきた縄文時代の諸説や時代観が大きくくつがえされようとしています。

このようななか、入間川を中心に水の豊かな河岸地帯と水に乏しい台地で形成されているここ狭山市でも、旧石器時代以降、先人の足跡が数多く残されています。縄文時代には入間川両岸に人々が定住し、火を起し、煮たきを始め、また生活用具である様々な顔をもつ土器、祭礼用としての土器、さらに、身を飾るための装身具をつくりだしました。

今回の企画展では、近年市内で発掘調査が行われた主な遺跡を取り上げ、縄文時代の狭山市がどのようなところであったか、また往時の人々の日々の生活から生みだされた縄文土器の魅力について、子供から大人まで興味のつきない資料を展示、紹介します。

この展示会をとおして、縄文土器の美しさに触れていただき、その世界観を感じとっていただければ幸いです。

最後に、本展開催にあたり、貴重な資料を快くご出品賜りました関係各位、並びにご多用の中をご指導・ご協力賜りました多くの方々に対し、心より厚くお礼申し上げます。

平成8年3月

狭山市立博物館

◆講演会 『埼玉の縄文文化』

日時 平成8年4月14日(日) 午後1時30分～3時00分

場所 博物館 研修・講義室

※聴講希望の方は、3月26日(火)から狭山市立博物館へ電話でお申し込み下さい。(定員50名)

講師 埼玉県埋蔵文化財調査事業団
専門調査員兼資料整理第二課長

宮崎 朝雄氏

◆体験学習 『縄文人の服を着よう!』

企画展開催期間中随時実施

場所 舞い舞いホール

- ◆開館時間 午前9時～午後5時
- ◆休館日 3/25、4/1、4/8、4/15、
4/22、4/26、4/30、5/7
- ◆入館料 一般150円(100円)
高校生・大学生100円(60円)
小学生・中学生 50円(30円)
※()内は20名以上の団体

 **狭山市立博物館**

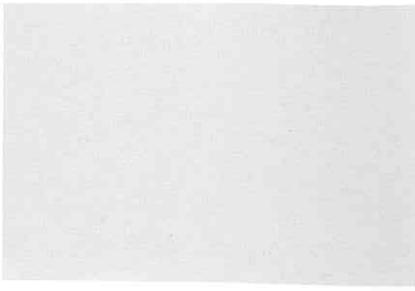
〒350-13 埼玉県狭山市稲荷山1-23-1
稲荷山公園(ハイドパーク)内
TEL.0429-55-3804 FAX.0429-55-3811



■交通/西武池袋線「稲荷山公園駅」から徒歩3分
西武新宿線「狭山市駅」西口からバス(稲荷山公園駅行)終点下車徒歩3分



出土品展
狭山の縄文時代



開催にあたって

最近、埋蔵文化財の発掘調査についての話題が、新聞・テレビやラジオなどでよく取り上げられ、市民の文化財に対する関心が高まり、埋蔵文化財の情報は、考古学者ら専門家だけのものではなくなりつつあるようです。現在、全国各地で進められている多くの発掘調査によって、地中に埋もれた文化や歴史が今、明らかにされてきています。特に、縄文時代については、青森県の大規模遺跡「三内丸山遺跡」の発掘成果から、これまで考えられてきた縄文時代の諸説や時代観が大きくくつがえされようとしています。

このようななか、入間川を中心に水の豊かな河岸地帯と水に乏しい台地で形成されているここ狭山市でも、旧石器時代以降、先人の足跡が数多く残されています。縄文時代には入間川両岸に人々が定住し、火を起し、煮たきを始め、また、生活用具である様々な顔を持つ土器、祭礼用としての土器、さらに身を飾るための装身具をつくりだしました。

今回の企画展では、近年市内で発掘調査が行われた主な遺跡を取り上げ、縄文時代の狭山市がどのようなところであったか、また往時の人々の日々の生活から生みだされた縄文土器の魅力について、子供から大人まで興味をつきない資料を展示、紹介します。

この展示会をとおして、縄文土器の美しさに触れていただき、その世界観を感じとっていただければ幸いです。

最後に、本展開催にあたり、貴重な資料を快くご出品賜りました関係各位、並びにご多用の中をご指導・ご協力賜りました多くの方々に対し、心より厚くお礼申し上げます。

平成8年3月

狭山市立博物館

出土品展 狭山の縄文時代

平成8年3月23日(土)～5月12日(日)

◆講演会 『埼玉の縄文文化』

日時 平成8年4月14日(日)午後1時30分～

場所 博物館 研修・講義室

講師 埼玉県埋蔵文化財調査事業団
専門調査員兼資料整理第二課長

宮崎 朝雄氏

◆体験学習 『縄文人の服を着よう!』

企画展開催期間中随時実施

場所 舞い舞いホール

— 凡 例 —

1. 本書は、平成8年3月23日から5月12日まで開催する企画展「出土品展 - 狭山の縄文時代 -」の図録である。
2. 図録中の掲載写真番号と展示資料の番号は一致する。
ただし、展示の順番は必ずしも番号順とは限らない。
3. 本企画展の狭山市出土資料ならびに丸山遺跡に関することについては、狭山市教育委員会生涯学習部社会教育課文化財係の協力を得た。
4. 本企画展の展示及び図録の編集は狭山市立博物館で行った。

目 次

縄文集落の環境	1
狭山の旧石器時代	3
狭山の縄文時代	4
I 草創期	4
II 早期	5
III 前期	5
IV 中期	6
V 後期	7
VI 晩期	7
縄文時代の海域	8
縄文土器の文様いろいろ	9
縄文人の衣服	11
縄文人の装身具	12
縄文人の食卓	13
I 魚介類・肉類の食べ方	13
II 木の実の食べ方	14
III 縄文クッキーの作り方	14
丸山遺跡(狭山市柏原字丸山)	15
I 概観	15
II 確認されたもの	17
III 土器はどのように埋まるか	18
IV 土器はどのような姿で出土するか	19
発掘調査・遺物整理の手順	21
展示資料一覧	22
狭山の縄文土器編年表	23
市内遺跡分布図	25
参考文献・協力者一覧	27

縄文集落の環境

今から約12,000年前、氷河期が終わり、地球の温暖化が急に進みました。南極大陸上の氷や高地の氷河が溶けだし、それが海にそそがれ海水面が上昇し、海岸線は現在よりも内陸にありました。この具体的な証拠として、現在、内陸部に確認されている貝塚があげられます。このような現象を「海進」といいます。この時期、日本では縄文時代が始まり、この地球規模での温暖化によって縄文文化が花開くこととなるのです。

縄文時代の主食は、シイ・カシ・ナラ・カシワなどのドングリ類やブナ・クリ・クルミ・トチなどの木の実とされています。地球規模の温暖化によって日本列島にこのような森の恵みがもたらされました。

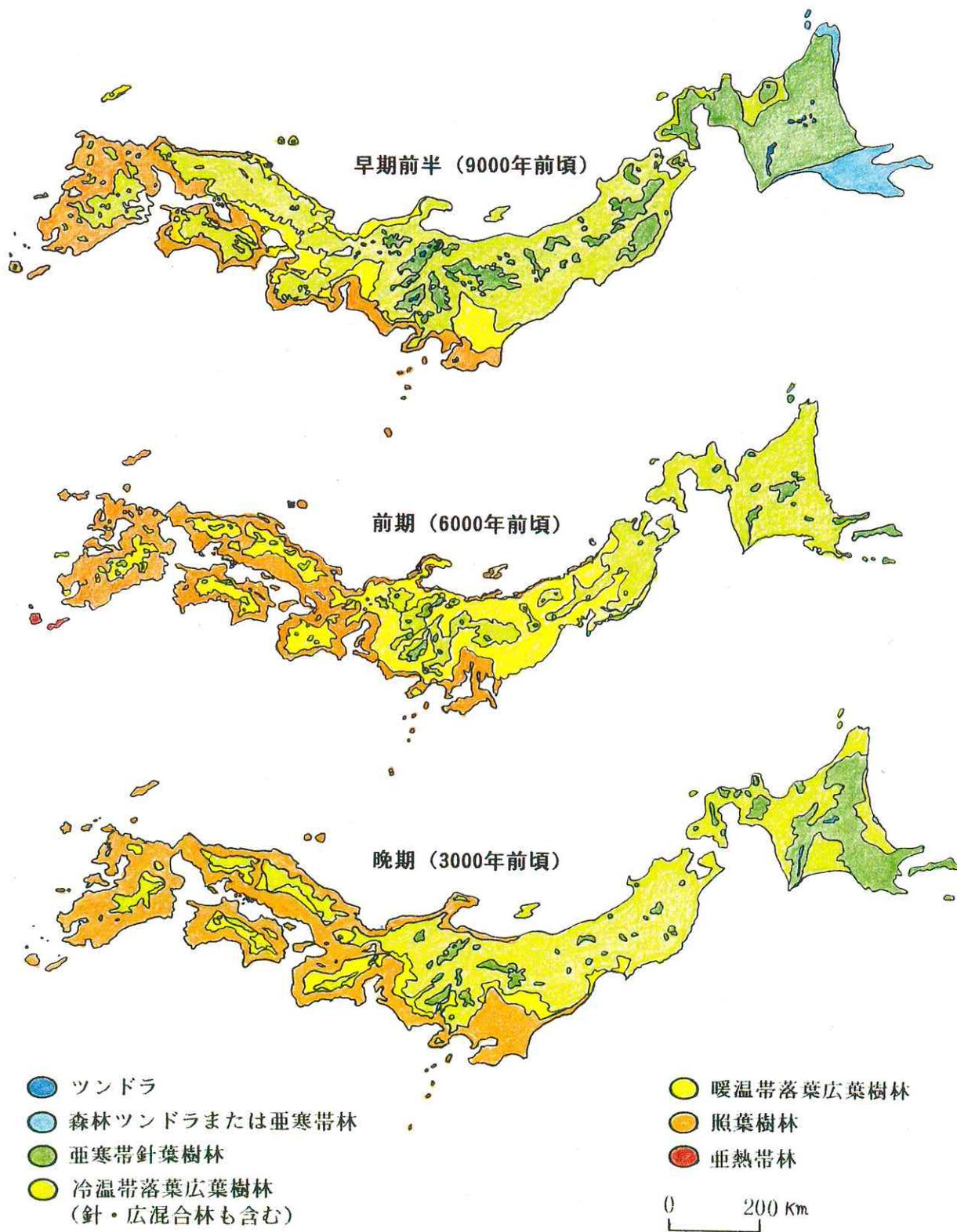
縄文時代の前期・中期における縄文集落からは、定住していた期間やつくられた住居の軒数から、食糧資源の豊富な森に囲まれたところで生活していたと考えることができます。これによって、周辺集落の古環境を復元するための最も有効な方法として、当時形成された土層から採取された花粉や種子、樹木の分析が積極的に進められています。

このような花粉分析などの成果により、これまでの縄文時代の日本各地の植生分布が、ほぼ明らかになってきています。埼玉県を始めとする関東地方は、縄文時代早期から冷・暖温帯落葉広葉樹林（ブナ・ナラ・クヌギ・クリなど）から照葉樹林（カシ・シイなど）が広がる圏内にあり、最も温暖化が進む前期には暖温帯落葉広葉樹林の圏内にほぼひとまとめにすることができます。豊富な食糧資源である森のおかげで、縄文集落は大きくなり、長期間にわたる定住生活が始まるようになってきたのです。なかでも、クリは食糧資源のなかでも重要な位置を占めていたようです。分析の結果からは、集落のまわりには多くのクリの木があったとされています。また、出土した実は現在の栽培に使われている種と同じくらいの大きさをしていて、栽培されていた可能性も考えられています。さらに、この森のなかでは、シカ・カモシカ・イノシシなどの動物も共存することができ、主食の他に獲物として縄文人の食事とされてきました。

縄文時代中期にいたっては、地球規模で気候が変化して、だんだんと寒冷化し、内陸部にあった海岸線が遠のいていきました。このような現象を「海退」といいます。内陸部に位置する前期の貝塚に比べて、この時期以降の貝塚遺跡は現在の海に近いところでつくられています。ただし、内陸部に根づいた森は大きく変わることなく、縄文人に恵みを与えつづけました。縄文時代前期以降、中期後半段階までの遺跡が内陸部に多いのはこのためだったのです。

縄文時代中期末になるとさらに寒冷化が進み、冷温帯落葉広葉樹林が下降しますが、一度大きくなった照葉樹林の成長はかたんととまることはなかったようです。これにより、前期以降の植生は大きな変化をとげ、ドングリの森は小さくなり、食糧資源は減ってきました。縄文人は、生活の様式を変えざるを得なくなってきたのです。この頃、トチなどが、他の植物よりも栄養価が高く大切であることがわかり、その栽培が積極的に行われていたことが考えられます。したがって、この段階で次の弥生時代で行われる稲作などの長期的栽培植物をつくる基礎ができたといえるのかもしれない。

なお、現在の日本で見られる植生は、この縄文時代晩期から成りたつてきたものと考えられています。



縄文時代の日本列島の植生図と古地理
 (安田喜憲著『環境考古学事始』日本放送出版協会 1980 年による)

狭山の旧石器時代

旧石器時代は、次の縄文時代に比べて同じ場所に長い間住むような生活はしないで、獲物を追い求めて、いろいろと場所を移動して生活をしていたと考えられています。このようなことから、この時代の住居跡の発見例は全国的にも少なく、市内でも確認されていません。また、煮たきなどに使われていた土器などもつくられていません。

市内の代表的な遺跡としては、入間川左岸に位置する西久保遺跡、森ノ上西遺跡、入間川右岸に位置する上中原遺跡があげられます。

西久保遺跡は、平成2年度から平成5年度にかけて首都圏中央連絡自動車道狭山・日高インターチェンジの建設に伴って発掘調査が行われました。この調査の結果、石器をつくった場所と考えられる石器集中地点が10か所、炉跡とされる礫群が4か所発見され、ナイフ形石器、搔・削器、石核など数多くの石器が出土しています。また、平成6年度には、狭山市遺跡調査会により再度調査が行われ、石器集中地点が3か所発見されています。出土したナイフ形石器から、この遺跡の年代は今から20,000年から18,000年前と推定されています。

これらは、狭山の旧石器時代を知る手がかりとして、貴重な資料になります。



西久保遺跡出土（狭山市）



3.4

西久保遺跡出土（狭山市）

狭山の縄文時代

縄文時代は、土器の表面に縄を転がして文様をつけた土器を使い、狩猟・採集で生活していた12,000年前から2,200年前ぐらいまでをいいます。

縄文土器は、現在、つくられている陶磁器とちがって、焼く時に窯を使わないので、焼成温度が低く（700 - 900度くらい）黒褐色や茶褐色をしています。ただ、外で焼くため、風の当たり具合によって温度が変化するので、部分的に色のちがう所があります。

縄文土器は、時期と地域によって土器の形や文様・装飾にちがひがあります。このような土器の変化を、考古学では、草創期・早期・前期・中期・後期・晩期と6期に区分しています。これを《土器の編年》と呼びます。

市内の遺跡を各期にあてはめると、草創期（3）、早期（3）、前期（19）、中期（37）、後期（16）、晩期（0）となっています。

草創期

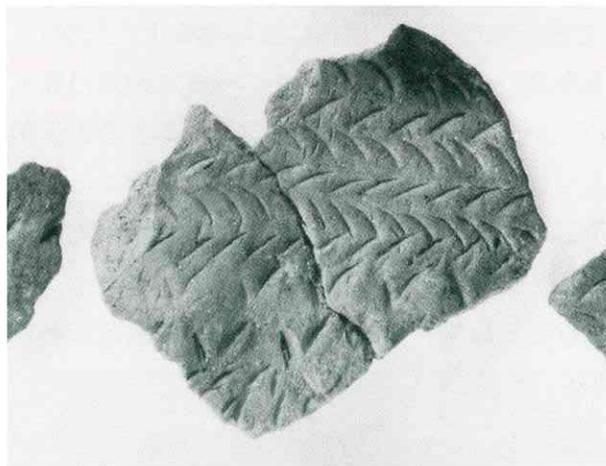
縄文土器が出現した時期です。

土器の形式は、比較的小形で土器の底部が丸かったり、平らだったりしていました。

文様は、豆粒状に粘土をつけたもの、細い粘土紐を土器の表面に貼りつけ、線状に盛りあげたもの（隆線文）、爪先を土器表面に押しつけて並べたもの（爪形文）などがみられます。

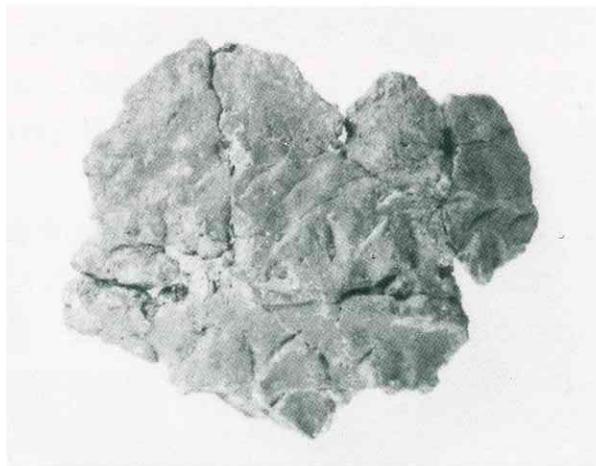
市内の代表的な遺跡としては、上の原遺跡、下双木遺跡、西久保遺跡があげられます。

この時期の土器の出土はありませんが、旧石器時代末期から縄文時代草創期を特徴づける尖頭器が採集されています。



7

宮林遺跡出土（花園町）



7

宮林遺跡出土（花園町）

早期

土器の形式は、深鉢形で底のとがっている尖底土器が多くつくられますが、一部では底部の平らな土器もみられ、早期後半頃から条痕文系土器の一部で胎土に繊維をまぜる土器がみられるようになりました。

文様は、撚った糸を棒にまきつけ土器の表面に転がしたもの（撚糸文）、棒に刻みを入れて転がすもの（押型文）、貝殻の腹縁を押しつけたもの（貝殻沈線文）、数本単位の条線を土器の表面全体につけるもの（条痕文）などがあります。

市内の代表的な遺跡としては、今宿遺跡、高根遺跡があげられます。

今宿遺跡は、昭和44年に発掘調査が行われました。ここからは、茅山式の炉穴（ファイヤーピット）が発掘され、その中から条痕文土器が出土しています。住居跡の確認はされていませんが、この時期に野外料理をしていたという生活の一端を知ることができます。

高根遺跡は、平成5年度に発掘調査が行われ、押型文土器の破片が1点出土しています。



10 明花向遺跡出土（浦和市）



9 今宿遺跡出土（狭山市）

前期

土器の形式は、煮たき用深鉢がほとんどでしたが、これ以外に盛りつけ用の台付土器を始めとして、壺や鉢もつくられるようになります。東日本では、土器の胎土に植物繊維を混ぜる繊維土器が盛んにつくられますが、西日本では、この土器はあまりみられません。

文様は、これまで少なかった縄文土器の名の由来である縄目模様が盛んに使われるようになり、土器全体をおおいつくすようになりました。撚った糸を使って木目状の模様をつくるもの（円筒土器系）、いろいろな縄を使って矢羽のような模様をつくるもの（羽状縄文）、竹管をそのままか、半分に切って表面に模様を描くもの（竹管文）などがあります。縄文時代早期末から前期前半頃までは、地球規模で温暖化が続きます。現在の東京湾が川越市付近まではいり込んでいた時期（縄文海進）で、県内の富士見市、浦和市、蓮田市などでは貝塚が多数発見されています。

市内では、貝塚は発見されていませんが、代表的な遺跡として、揚櫓木遺跡、八木上遺跡があげられ、前期前半の黒浜式土器を伴う集落跡が確認されています。



11 揚櫓木遺跡出土（狭山市）



14 塚屋遺跡出土（寄居町）

中期

縄文文化が最も花開いた時期です。

土器の形式は、煮たき用深鉢の他、盛りつけ用浅鉢が定着し、有孔罎付土器など、前期に比べて新たな形がつくられ始めます。口縁部が波打つような波状のものや大形の把手がつけられたものが多くなっています。代表例としては、関東・中部地方に分布する勝坂式土器が新潟県に多くみられる火炎土器があげられます。

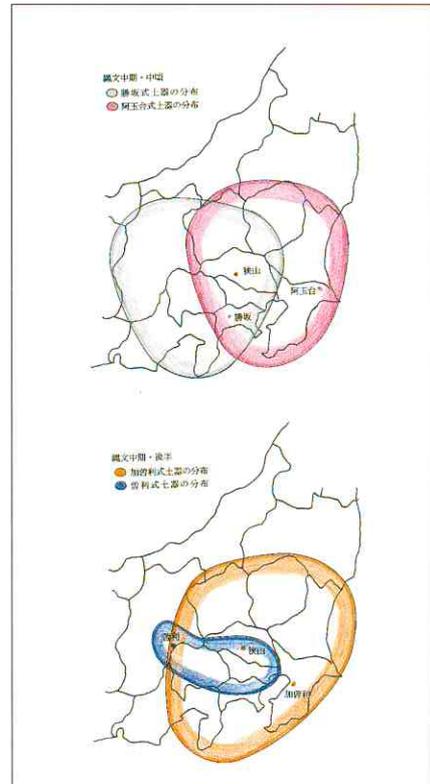
文様は、土器の表面全体をおおいつくすようになります。ただし、いろいろな道具を使ってつける沈線や粘土紐を貼りつけた隆起線が主体となり、縄文土器の名前の由来でもある縄目模様は、地文として使われるだけになってきます。

遺跡数は、中期初め頃には一時的に少なくなりますが、中期半ば頃の気候は、縄文時代のなかでも、最も安定していたと考えられ、定住に伴って竪穴住居が急激に増加し、集落の規模も拡大します。東日本には、大規模な環状集落遺跡が分布します。終末頃の気候は、地球規模で寒冷化するため、集落が小規模になり、人口が減ってきたと考えられ、住居の形も柄鏡形住居と呼ばれるものがつくられ、石を床に敷く敷石住居が出現します。

市内の代表的な遺跡としては、県選定重要遺跡でもある宮地遺跡を始め、丸山遺跡、揚櫛木遺跡、森ノ上遺跡があげられます。

なかでも、宮地遺跡は現在までに5回にわたって発掘調査が行われ、孤を描くように分布する70軒近くの竪穴住居跡が発見されています。

また、この時期は、狭山市の縄文時代を特徴づける時期でもあり、前期に比べ、出土品が豊富で、遺跡数も倍増し、集落の規模が大きくなってきます。



土器の分布



31 丸山遺跡出土（狭山市）



43 丸山遺跡出土（狭山市）



49 八木遺跡出土（狭山市）



41 揚櫛木遺跡出土（狭山市）

後期

土器の形式が、中期に引き続きいろいろと変化に富み、浅鉢形や、口のふたつある双口土器などが出土してきます。後期後半になると、ていねいに細かくつくりあげられた土器と煮たき用に粗雑につくられた土器とつくり分けられるようになります。

文様は、中期後半から使われている磨消縄文が多く用いられるようになります。

また、祭祀の時に使われたとされる土偶・石棒などの特別な道具も盛んにつくられるようになりました。

市内の代表的な遺跡としては、高根遺跡、宮原遺跡があげられます。

ここでは、土器片の他に、漁撈活動に必要な石錘（おもり）が数多く採集されました。また、石に小さな穴をあけたペンダントや石棒のミニチュアのような細工したものも発掘され、当時の装飾品について知ることができます。

後期末から次の晩期にかけての土器は、現在まで確認されていません。

この時期は、東京湾沿岸を中心に大規模な貝塚がつくられますが、狭山市を含む内陸部では、遺跡数が急に減り、集落の規模も小規模になってきます。



56 字尻遺跡出土（狭山市）



57 高根遺跡出土（狭山市）

晩期

土器の形式が、東日本と西日本でそれぞれちがいをあらわしてきます。東日本では、縄文土器の技法と文様が最高のものにいきつき、精巧な工芸品のような印象をあたえます。

文様は、磨消縄文が細かく、複雑に表現されるようになります。代表例としては、青森県木造町で出土した亀ヶ岡式土器があげられます。一方、西日本では、縄文式土器らしくない土器が広がり、土器の形式が単純になり、文様も、縄を使ったものが少なくなり、土器の表面をみがいた無文土器が多くなってきます。これは、新しい文化の芽生え、弥生文化への移り変わりのあらわれといえるでしょう。

この時期の遺跡は、市内では確認されていませんが、飯能市では、晩期の集落遺跡が確認されています。



70 赤城遺跡出土（川里村）



72 在家遺跡出土（上尾市）

縄文土器の文様いろいろ

●羽状縄文（うじょうじょうもん）

鳥の羽根のような縄目文様で、土器の表面に右撚りと左撚りの紐を交互に転がすことによつてつくるものと、あらかじめ撚りのちがう紐を結び、一度の回転で羽状をつくるものがある。



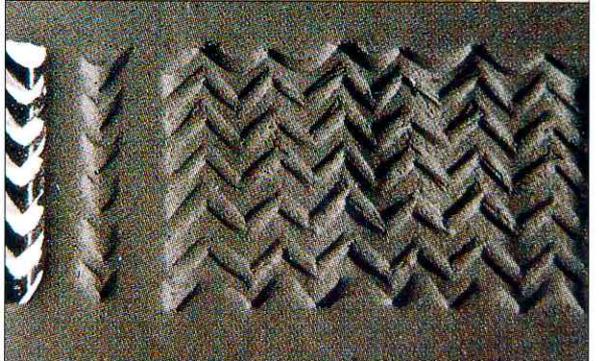
●渦巻文（うずまきもん）

うずまき状の文様で、土器の表面に粘土紐を貼りつけてつくるものと、線描きであらわすものがある。



●押型文（おしがたもん）

鉛筆くらいの太さの丸い棒を彫つて道具をつくり、それを土器の表面に転がしながら押しつけてつくるもの。



●貝殻文（かいがらもん）

二枚貝や巻き貝で、土器の表面に刻みをつけた後、沈線を引いてつくるもの。



●区画文（くかくもん）

粘土を貼りつけたり、ヘラ状の道具などを使って土器の表面に沈線で区画をつくり、その内側を縄文や沈線でうめるもの。



●懸垂文 (けんすいもん)

土器の胴部に隆線や沈線で垂直につけるもの。



●磨消縄文 (すりけしじょうもん)

土器の表面につけた縄文を沈線で区画し、その区画の内または外の縄文をすりけしてつくるものと、先に沈線で区画してから縄文をつけたものがある。



●沈線文 (ちんせんもん)

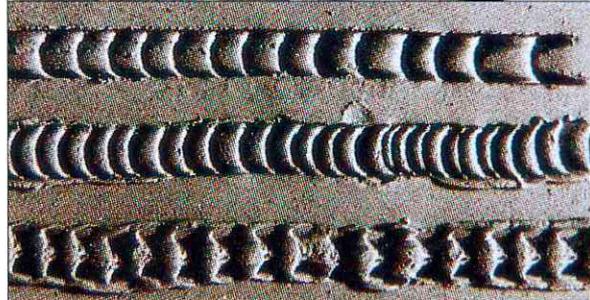
木片や竹・貝殻などを使って土器の表面にくぼみや溝をつけるもの。



●竹管文 (ちくかんもん)

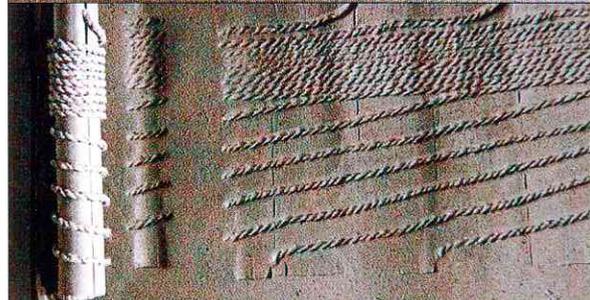
●爪形文 (つめがたもん)

割竹や貝殻を使って爪痕のようにしたり、実際に爪で文様を帯状につけるもの。



●撚糸文 (よりいともん)

細く撚った縄を棒に巻きつけ、それを土器の表面に転がしながら押しつけてつけるもの。



●隆線文 (りゅうせんもん)

粘土紐を貼りつけるものと、指やへらなどで土器の表面を線状に盛りあげて、ミミズ腫れ状の細かい隆線をつけるものがある。



縄文人の衣服

縄文人の衣服には、いろいろな説があります。

一般に縄文人は、狩猟・採集生活が基本と考えられているため、動物の毛皮をなめして衣服をつくっていたとか、裸でいたようなイメージが強いのですが、縄文時代に盛んにつくられていた土偶に描かれている模様から、縄文人の衣服の存在が明らかにされていると思われます。

土偶の様子は、多くの道具を使って縄目、線、穴などがつけられています。模様からは、普段着と区別された特別な衣服と考えられ、実際には色づけされていたともいわれています。

衣服の形式は、頭からかぶって両脇を結び貫頭衣や前で合わせるものが考えられます。

衣服の素材は、植物の繊維（カラムシ・アサ・イラクサなど）や樹皮などがあげられ、きっと、暑い季節にはこれらを使って編まれた編布の服を着て、寒い季節には動物の毛皮をなめしてつくった服を着ていたのでしょう。

服地には、織った織布と編んだ編布があります。どちらも出土例は極めて少ないものですが織布は、糸をつむぐ方法がしっかりとされていなかったため、生産量に限界があり実際に衣服に使われていたかどうかは不明です。編布は、布を織るための機械を使わずに編んだ布のことで、たて糸を1本1本交差させて、その間によこ糸をはさみこんで編んだものをいいます。現在のスタレやムシロのような編み方をします。

市内では発見されていませんが、この編布が縄文時代に編まれていたことは、縄文土器の底部にこの編布の圧痕が残っているものがあり、そこからいろいろな編み方が確認されています。



75

網代痕



75

網代痕



75

網代痕



74
土偶・前



74
土偶・後

赤城遺跡出土（川里村）

縄文人の装身具

縄文時代の装身具は、髪飾り、耳飾り、首飾り、腰飾り、腕輪などがあり、その素材は、土や石、木、動物の骨・角、貝などさまざまなものが使われています。

これらの装身具からは、縄文人が男性も女性も関係なくおしゃれを好んでいたかもしれません。

また、身を飾ることで悪い霊をはらったり、身を守るためのおまじないとしての意味もあったと考えられているようです。

髪飾り

動物の骨の角でつくられたヘアピンと、ていねいに彩色し漆の塗られた櫛があげられます。

耳飾り

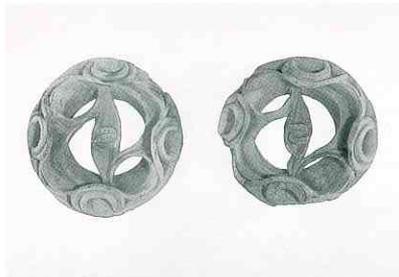
縄文時代の装身具の代表例で、土製と石製のものがあり、耳たぶに孔をあけ、そこにはめ込む形で使われていました。現在でいうピアスに近いものですが、あけられる孔は現在とちがってとても大きい孔です。

首飾り

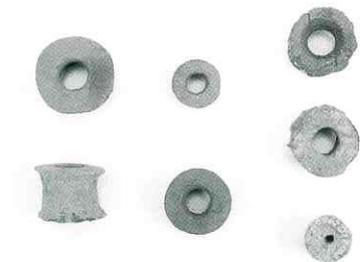
土製、石製、動物の骨製のペンダントのようなものの他、貝殻をつなげてつくられたものがあります。また、現在でも宝石として珍重されているヒスイ製のすばらしいものもまれにみられることがあります。

腕輪

貝輪と呼ばれる貝殻製のものが一般的だったようです。



77 赤城遺跡出土（川里村）



76 丸山遺跡・宮地遺跡出土（狭山市）



78 宮原遺跡出土（狭山市）

装飾・加工

これらの装身具の他に、自分の体に直接、装飾・加工することもありました。装飾では、土偶や仮面などの模様から赤、黒などの入墨や顔料が塗られていたことがわかり、加工では、出土した人骨から上下の前歯・犬歯を対象とした抜歯や歯に溝を掘り込む叉状研歯などが確認されています。

歯を抜いたり、歯に穴を開けたりするのは、痛みが激しいため、日常的なものではなく、成人式などの儀礼の時に行ったものと考えられています。

縄文人の食卓

縄文時代の食生活については、「低湿地遺跡」や「貝塚」の調査から知ることができます。

「低湿地遺跡」とは、湧き水や地下水によって縄文時代から現代まで水に浸かったような状態で保存されていた遺跡で、木や樹皮などから加工された遺物や木の実などの種子が残されています。

「貝塚」とは、縄文人がゴミや食べ残しなどを捨てた場所で、そこからは、貝殻、魚や動物の骨など大量に出土します。

狩猟・採集生活を中心におくっていた縄文人の主食は、ドングリ・クリ・クルミ・トチなどの木の実だと考えられ、これらは、採集に危険を伴わないため女性や子供たちによって、季節のものを計画的に採集し、貯蔵していました。同様に、貝類の採集も女性の仕事と考えられています。男性は弓矢やワナなどをしかけて、動物（シカ・イノシシなど）をつかまえたり、海に出て魚をとってきたと思われます。

縄文人たちは、これらの豊富な山海の幸を食卓に出していたのでしょう。

魚介類・肉類の食べ方

焼く、煮る、蒸す、茹でる、煎るなど現在ある調理法はすべて行われていた。

1. 貝類は、一度に大量に煮て、スープの具にしたり、干し貝にする
2. 魚や肉類は、焼いた石で丸焼き、蒸し焼きにしたり、燻製にする

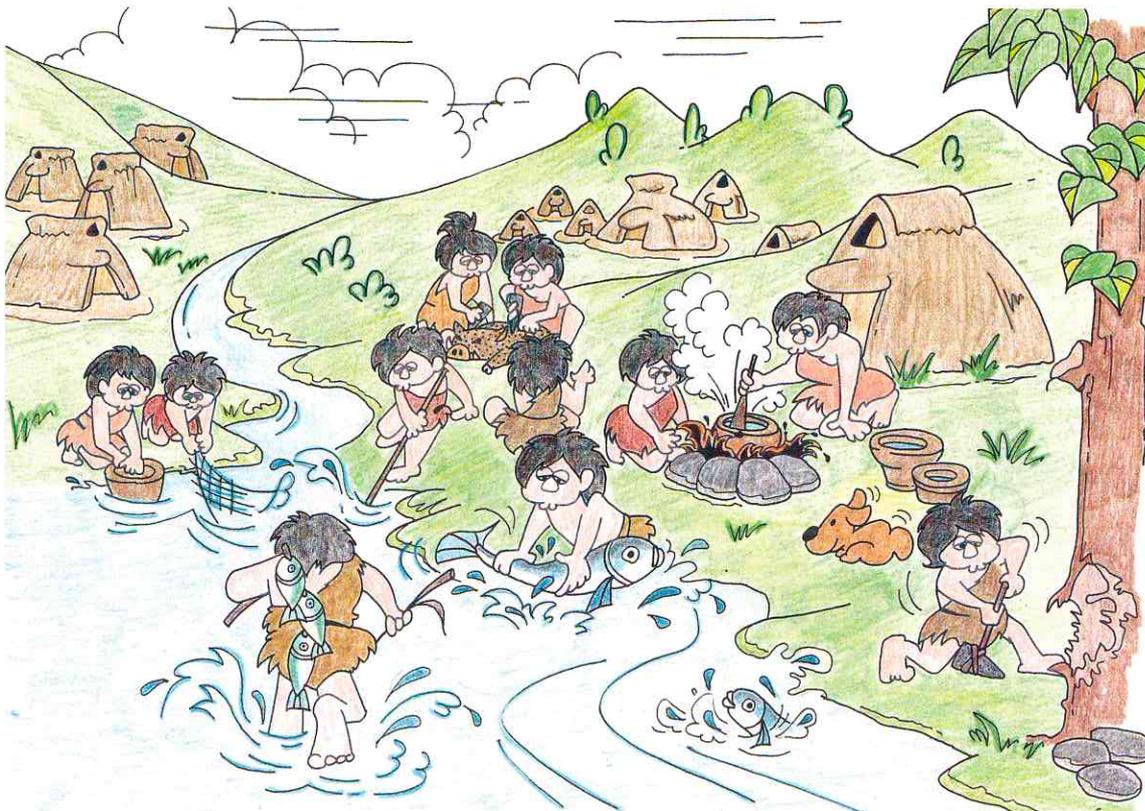


普通の生活で食べたり、保存食としていた



85

ウキ石



生活の様子

木の実の食べ方

1. 多孔石や台石を使って、殻を割る
2. 取り出した実を石皿と磨石ですりつぶす
3. 粉を土器に入れ、水でさらしたり、灰をまぜて煮たりしてアクをぬく
4. アク抜きした粉をかわかして、保存する



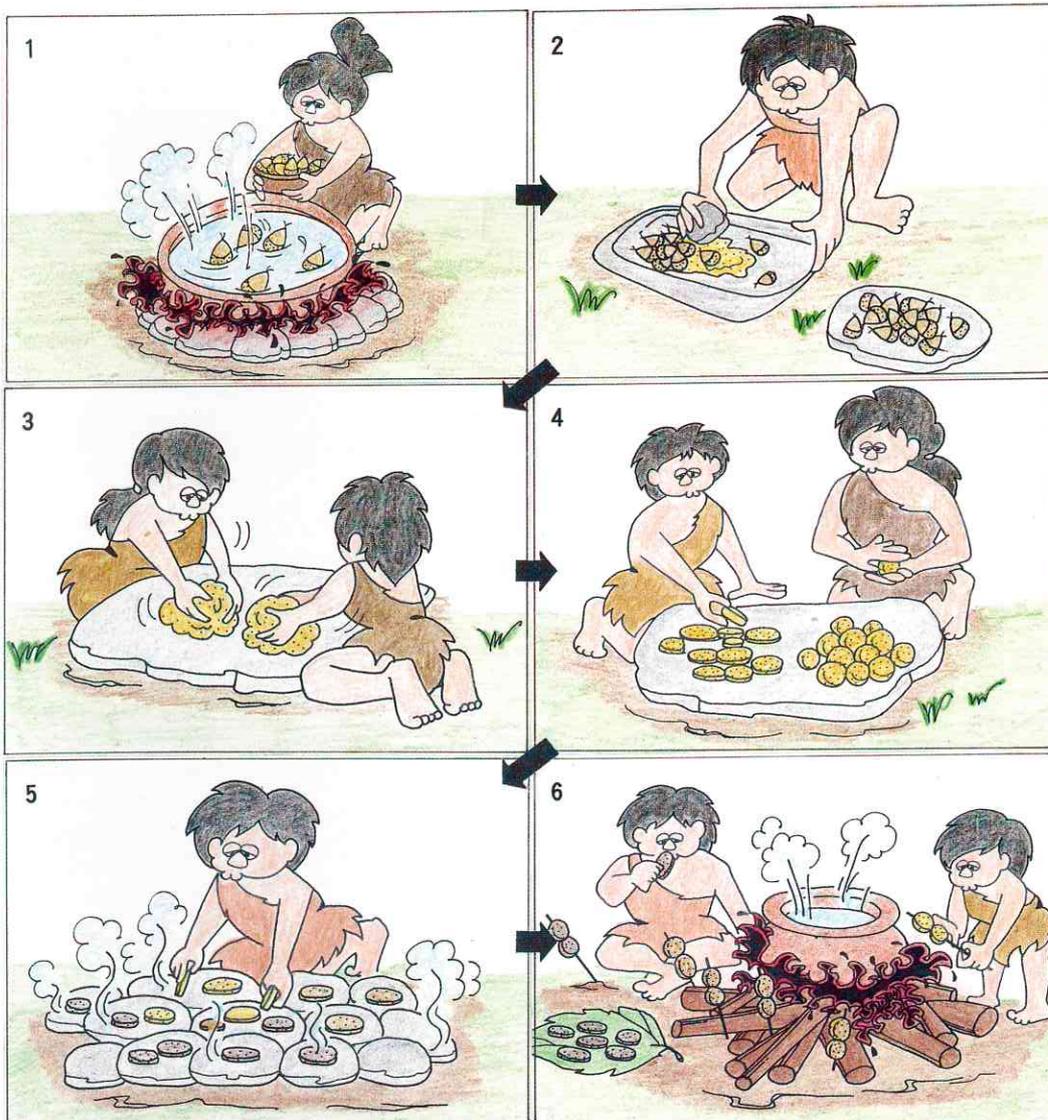
86

石皿と磨石

この粉にクリ、クルミをくだいたものをまぜて、動物の血、脂や山芋などをつなぎにして、団子状、パン状にまるめておく。

1. 魚介類や肉のスープの中に入れて煮て食べる
2. 直接焼いてクッキーやパンのようにして食べる

縄文クッキーの作り方



1. 木の实の虫を殺すために煮る
2. 皮をむいておおまかにつぶす
3. 灰をいれて煮ながらアクをとる
4. 水気をきって粉状にすりつぶす
5. 粉状のものに、山芋・水をたしながらこねる
6. 厚さ5mmの小判くらいの大きさにして焼く

丸山遺跡(狹山市柏原字丸山)

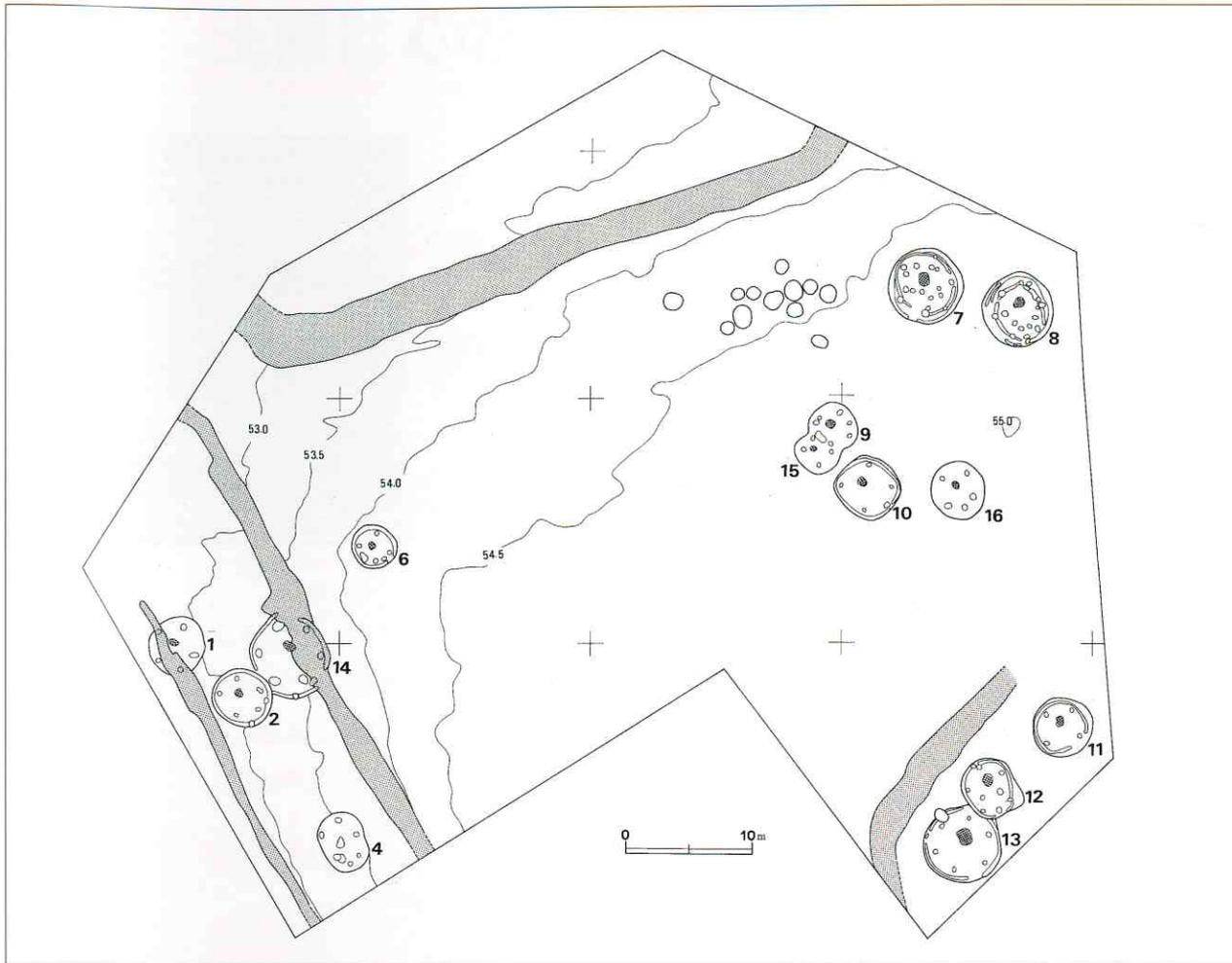
丸山遺跡は、入間川左岸の第二段丘面のやや奥まったところにあり、周囲を小さい谷に囲まれた独立丘上に位置しています。標高は、遺跡中央部で約 55 m、周辺部で約 50 m、遺跡の総面積は、推定で 34,000 m²ほどあります。

昭和 56 年度の遺跡詳細分布調査で時期、範囲、規模が確定し、縄文時代前・中期及び奈良・平安時代の複合集落であることがわかりました。この時、丸山遺跡の南端の約 22 m × 15 m、面積にして 330 m²の範囲で、2 m 四方のグリッドを設定し、手掘りで調査しましたが、遺構の確認はなく、大変すりへった縄文土器片が数点発掘されただけでした。

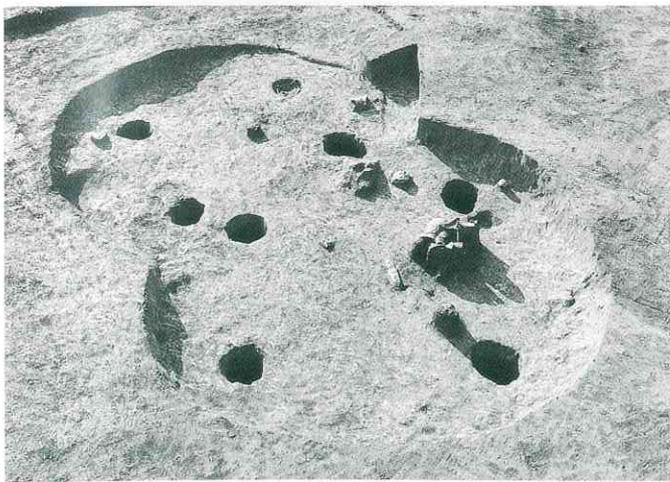
今回のテーマである縄文時代の集落跡は、平成 3 年 10 月から翌平成 4 年 2 月までのグランド造成に伴う調査で行われ、その結果、竪穴住居跡 14 軒、土壇 10 基、集石土壇 1 基が確認されました。調査を進めていくと、これらの遺構群からは、径約 80 m の範囲で半円形状に分布していることがわかりました。このことから、鉄塔周辺の緑地保存されている場所と丸山遺跡の南斜面側の未調査地区には、さらに多くの住居跡が埋蔵されているものと考えられます。遺構が出てくる深さは、地表から 10 cm ~ 60 cm で、掘られたあともなく、遺跡の状態は、良い方でした。



丸山遺跡全景



丸山遺跡全体図



重複住居跡 (第9号と第15号)



上：土壇
下：集石土壇

確認されたもの

竪穴住居跡

竪穴住居跡は、円形あるいは楕円形を基本とし、規模は、直径3.5 m～6 mほどの大きさでした。床面中央には、土器や河原石、石器などを使った炉がつくられ、その周囲に4～6か所の柱穴が掘られています。壁際には、溝が掘られてあり、これは壁を保護するための樹皮などを固定する目的で掘られたものと考えられています。住居の建てられた時期は、土器の形式から縄文時代中期の勝坂式期から加曽利E式期までで、多少、時期により住居の形式差を見ることができます。また、ここで、特徴的なものは炉で、①勝坂式期の住居跡には勝坂式土器を埋めてつくられた炉、②①の炉の周囲に石を埋めてつくられたものが2種、③加曽利E式期の住居跡にはやや大形の石で囲まれた炉の3種類が確認されました。住居の規模も、家族構成の差によると思われませんが、勝坂式期では3.5 m～6 mとばらつきがあり、加曽利E式期では5 m～6 m内外とほぼ一定しています。



発掘風景



勝坂式土器を埋めてつくられた炉
(左：上からみたところ 右：横からみたところ)

土壙・集石土壙

土壙は、丸山遺跡の北東部にかたまつて確認されました。形状や出土遺物からは確定できませんが、どれも鍋底状の断面をしているので、貯蔵用の穴かお墓のどちらかと考えられます。

集石土壙からは、焼けた石が割れた状態で数多く出土しました。バーベキュー、蒸焼きなどの野外料理場と考えられ、当時の食生活の一端を知ることができます。

出土遺物

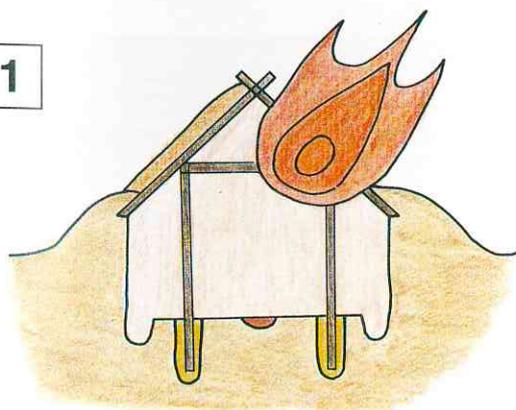
出土遺物としては、第2号住居跡から出土した一括で捨てられたと思われる土器群30個体を含む縄文土器160点、打製石斧439点、磨製石斧5点、石鏃7点、石錘1点などがあります。

その他の遺構

その他の遺構として、近世以降のものと思われる溝が5条、遺物には土師器・須恵器の破片、時期不詳の鉄クズなどがありました。

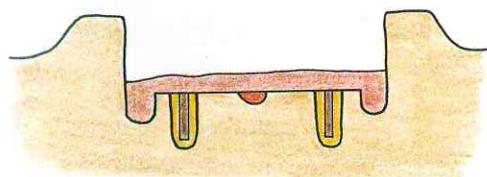
土器はどのように埋まるか!!

1



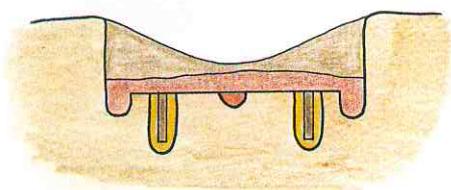
住居が捨てられ、火がつけられます。また、床面上の道具類はほとんど運びだされています。

2



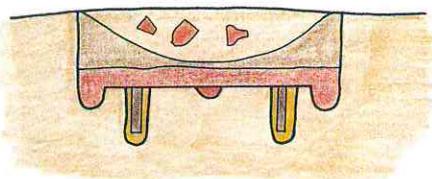
床面上、10 cm程度の厚さに炭と焼けた土の層ができます。床面も熱を受けて焼けています。

3



周囲から土の流れ込みが始まります。(自然によるものか、人によるものか、意見がわかれています。)

4



土器や石器が大量に捨てられ、その後、住居は完全に埋まってしまいます。(土器についても、捨てられたものか、置かれたものか、意見がわかれています。)

土器はどのような姿で出土するか！！

—丸山遺跡第2号住居跡—

縄文時代の遺跡では、いろいろな姿で土器が出土し、その多くは凹地状になっている住居跡などの遺構をおおう土の中から発見されます。住居跡では、数多くの土器、石器などが捨てられ、その後に住居が埋めもどされているようです。この時埋めもどす土は、堅穴が掘られた時に出た赤土（ローム）で、住居のまわりに土手のように盛られていた土を利用していると考えられています。



第2号住居跡全景

ここでは、丸山遺跡第2号住居跡を例にあげてみましょう。

ここからは、30個体もの土器の他、耳飾り1点、石斧65点、石皿3点などがおりかさなるように出土しました。このようなケースを「一括廃棄現象」と呼びます。一見いらぬものをまとめて捨てたようにみえますが、土器の出土状態をみると「ゴミ捨て場」といえない部分があるのです。

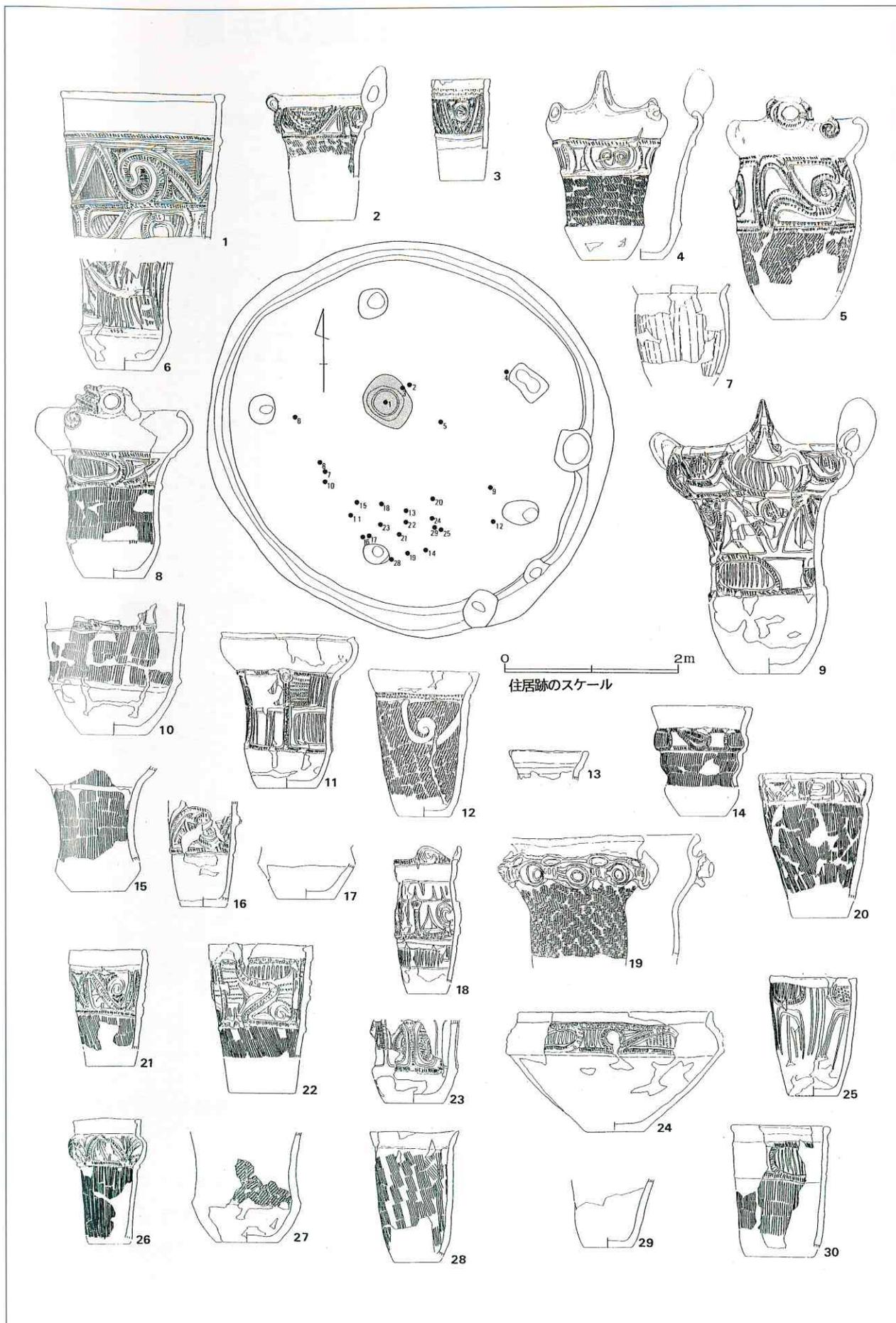
右ページの図は、住居跡と出土した土器を並べたものです。1の土器は、炉として使われていたもので、胴の下半分が欠けています。これは、煮たきに使われていたものを再利用したもので、いわば、住居跡と一体化した土器といえます。この他の土器は、住居跡をおおう土の中から発見されたのですが、2・3・5の土器は、住居の床面に横倒しになって出土し、3は2の土器の中に「入り子」状になっていました。これらは、置かれた状態で捨てられたものと考えられます。このことから、炉に使われていた土器と床面から出土した土器とは時期差がみられないということがわかり、4・6～8・10～30の土器もこれにあたります。一方、9の土器は床面に散乱した状態で発見されています。これは、投げ捨てられたものと考えられます。置かれた状態で捨てられたものと散乱した状態で発見されたものとのちがいが、何を示しているのかはわかっていません。下の出土状態の写真をみると原型を保っているものや、横倒しになって土の圧力でつぶれたようになっているものが意外に多いことがわかります。つまり、あたかも置かれたような状態のものが多く、投げ捨てられ壊れて飛び散ったような土器は少ないということです。

この「一括廃棄現象」の原因については、土器をまとめて焼く季節があつて、その時期になると古い土器をまとめて捨てるという「土器づくり季節説」と、住居床面に死者を埋葬し、埋めもどし



出土状態

た後にその人にゆかりのあるものを埋納した「廃屋墓説」があります。はっきりとしたことはいまだわかっていませんが、どちらの説にしても、土器が捨てられる時はていねいに扱われていたことがわかります。



第2号住居跡と出土土器

発掘調査・遺物整理の手順



1. 部分的に掘って遺跡の状況を調べる
2. ローム層を平らに削って遺構の所在を確かめる
3. それぞれの遺構の埋もれ方や出土品に注意して遺構を掘る
4. 実測して遺構に係わる図面を作成する
5. 遺構を掘りながら随時写真にとる
6. 遺構を埋めもどす
7. 遺物をきれいに洗い、出土場所などを遺物に注記する
8. 同一個体の出土品を集めてつなげていく
9. 接合した出土品を石こうで完型に復元する
10. 実測して遺物の図面を作成したり、拓本をとる
11. 遺物の写真をとる
12. 報告書を書いたり、展示会を開催する

展示資料一覽

時代	No.	展示資料	遺跡名	備考		
旧石器時代	1	ナイフ形石器	上原跡	メノウ製 チャート製 ※		
	2	ナイフ形石器	中上原跡			
	3	ナイフ形石器	西久保跡			
	4	石核	西久保跡			
縄文時代	5	両面加工尖頭器	上ノ原跡	凝灰岩製 ※2点一括		
	6	舌頭器	ノ原跡			
	7	爪形土器	双木遺跡 (花園町)			
	草創期	8	撚糸文破片群		宮林遺跡 (花園町)	70点一括 ※2点一括
		9	糸痕文土器		林宿向遺跡 (浦和市)	
		10	糸痕文土器		明花向遺跡 (浦和市)	
		11	深鉢土器 (黒浜式)		揚櫃木遺跡	
	12	深鉢土器 (黒浜式)	揚櫃木遺跡			
	13	深鉢土器 (黒浜式)	揚櫃木遺跡			
	14	深鉢土器 (諸磯a式)	塚屋遺跡 (寄居町)			
	15	深鉢土器 (諸磯b式)	塚屋遺跡 (寄居町)			
	16	深鉢土器 (諸磯c式)	塚屋遺跡 (寄居町)			
	17	深鉢土器 (諸磯c式)	金井上遺跡			
	前期	18	深鉢土器 (阿玉台式)	亀居遺跡 (大井町)	※	
		19	深鉢土器 (阿玉台式)	亀居遺跡 (大井町)		
		20	深鉢土器 (勝坂式)	丸山遺跡		
		21	深鉢土器 (勝坂式)	丸山遺跡		
		22	深鉢土器 (勝坂式)	丸山遺跡		
		23	深鉢土器 (勝坂式)	丸山遺跡		
		24	深鉢土器 (勝坂式)	丸山遺跡		
		25	深鉢土器 (勝坂式)	丸山遺跡		
		26	深鉢土器 (勝坂式)	丸山遺跡		
		27	深鉢土器 (勝坂式)	丸山遺跡		
		28	深鉢土器 (勝坂式)	丸山遺跡		
		29	深鉢土器 (勝坂式)	丸山遺跡		
		30	深鉢土器 (勝坂式)	丸山遺跡		
		31	深鉢土器 (勝坂式)	丸山遺跡		
		32	深鉢土器 (勝坂式)	宮地遺跡		
		33	深鉢土器 (加曾利EⅠ式)	丸山遺跡		
		34	深鉢土器 (加曾利EⅠ式)	丸山遺跡		
		35	深鉢土器 (加曾利EⅠ式)	宮地遺跡		
		36	深鉢土器 (加曾利EⅠ式)	宮地遺跡		
		37	深鉢土器 (加曾利EⅠ式)	宮地遺跡		
		38	深鉢土器 (加曾利EⅠ式)	宮地遺跡		
		39	深鉢土器 (加曾利EⅠ式)	宮地遺跡		
		40	深鉢土器 (加曾利EⅠ式)	宮地遺跡		
		41	深鉢土器 (連弧文土器)	宮地遺跡		
		42	深鉢土器 (曾利式)	丸山遺跡		
		43	深鉢土器 (加曾利EⅡ式)	丸山遺跡		
		44	深鉢土器 (加曾利EⅡ式)	宮地遺跡		
		45	深鉢土器 (加曾利EⅢ式)	宮地遺跡		
		46	深鉢土器 (加曾利EⅢ式)	揚櫃木遺跡		
		47	深鉢土器 (加曾利EⅢ式)	揚櫃木遺跡		
		48	有孔鍔付土器 (加曾利EⅣ式)	宮地遺跡		
		49	深鉢土器 (加曾利EⅣ式)	揚櫃木遺跡		
	50	打製石斧	丸山遺跡			
	51	磨製石斧	丸山遺跡			
	52	砥石	丸山遺跡			
	53	ミスクレーパー	丸山遺跡			
	54	スクリュー	丸山遺跡			
	後期	55	深鉢土器 (称名寺式)	高根遺跡	※	
		56	深鉢土器 (称名寺式)	高根遺跡		
		57	深鉢土器 (堀之内式)	高根遺跡		
		58	深鉢土器 (堀之内式)	高根遺跡		
59		深鉢土器 (堀之内式)	高根遺跡			
60		注口土器 (堀之内Ⅱ式)	東原遺跡 (日高市)			
61		深鉢土器 (加曾利B式)	東原遺跡 (日高市)			
62		深鉢土器 (加曾利B式)	中三谷遺跡 (鴻巣市)			
63		注口土器 (加曾利B式)	赤城遺跡 (川里村)			
64		深鉢土器 (加曾利B式)	赤城遺跡 (川里村)			
65		注口土器 (安行Ⅰ式)	赤城遺跡 (川里村)			
66		注口土器 (安行Ⅱ式)	赤城遺跡 (川里村)			
67		注口土器 (安行Ⅱ式)	赤城遺跡 (川里村)			
68		深鉢土器 (安行Ⅱ式)	赤城遺跡 (川里村)			
69		皿 (大洞式)	赤城遺跡 (川里村)			
70		壺 (大洞式)	赤城遺跡 (川里村)			
71		注口土器 (大洞式)	赤城遺跡 (川里村)			
72		浅鉢 (千網式)	赤城遺跡 (川里村)			
晩期	73	編布	赤城遺跡 (川里村)	複製 ※埼玉県指定文化財 ※8点一括		
	74	土偶	赤城遺跡 (川里村)			
	75	網代痕	赤城遺跡 (川里村)			
	76	耳飾り	宮地、丸山遺跡 (川里村)			
衣服	77	耳飾り	赤城遺跡 (川里村)	※		
	78	ペンダント	赤城遺跡 (川里村)			
	79	ペンダント	宮原遺跡			
	80	ペンダント	西ノ原遺跡他 (大井町)			
丸山遺跡 2号住居跡 生活復元	81	出土土器	西ノ原遺跡他 (大井町)	30点一括 70点一括 複製 ※		
	82	出土土器				
	83	縄文クッキー、木の実 (トチ、ドングリ、シイ)、貝殻 (アサリ、シジミ、ハマグリ)				
	84	縄文人の暮らし、たべものカレンダー				
	85	石錘・ウキ石				
	86	磨石・石皿				
	87	火おこし道具				
舞い舞いホール		発掘道具				

※ 備考の※は、図録に写真掲載したものである。

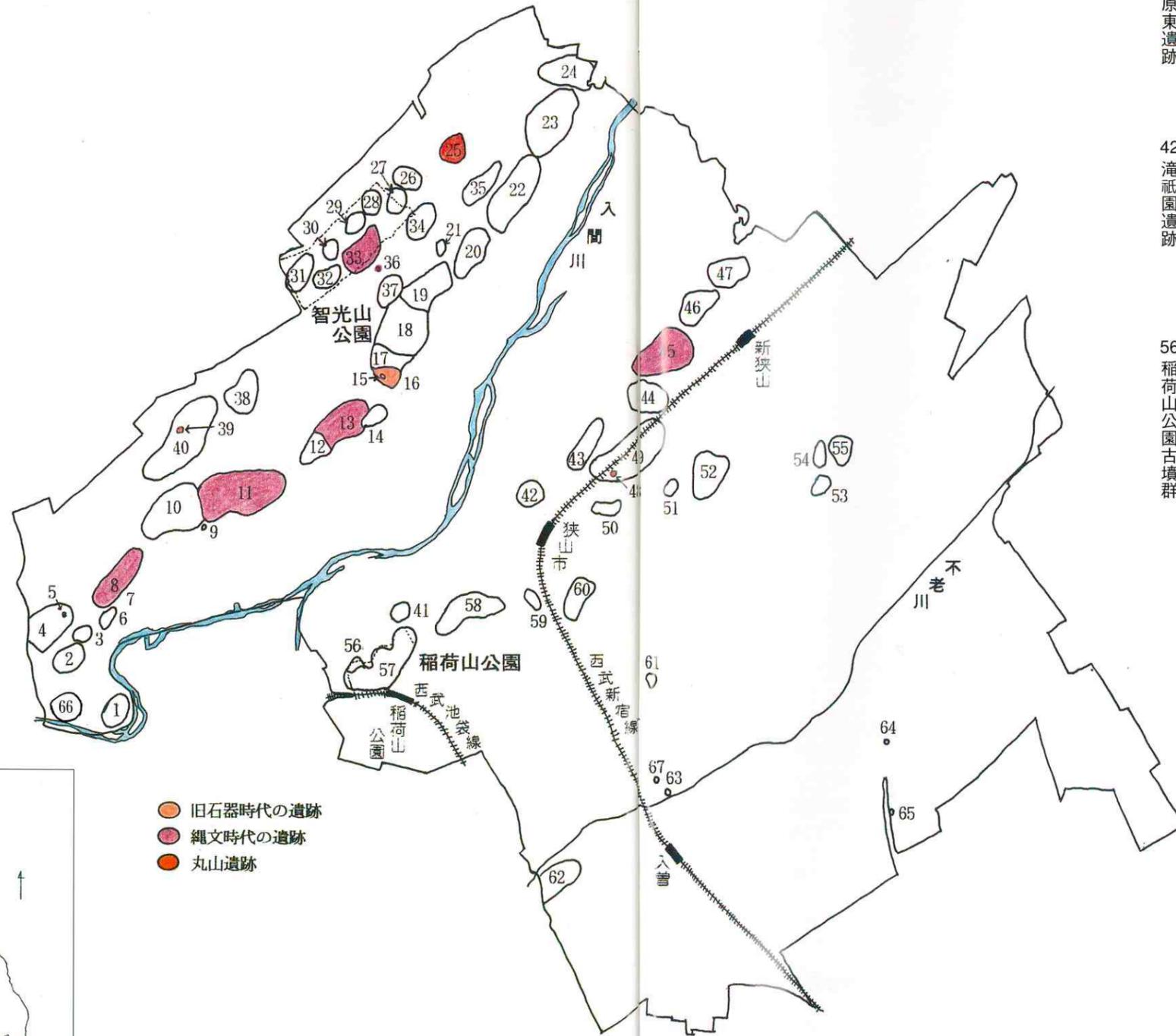
狭山の縄文土器編年表

今から	時代区分	市内出土の縄文土器	市内の縄文遺跡	主なできごと
12000年前	草創期	隆線文系 爪形文系	上ノ原(上広瀬) 下双木(柏原)	<ul style="list-style-type: none"> 縄文土器がつくられ始める 弓矢を使い始める
9000年前	早期	撚糸文系 条痕文系	今宿(上広瀬)	<ul style="list-style-type: none"> この頃、気温が温暖化する この頃、縄文海進がおこる 竪穴住居に住む 竪穴住居の中に炉ができる 人々は狩りや漁撈などで生活し貝塚などを残す
6000年前	前期	羽状縄文系 諸磯式 十三菩提式	八木(笹井) 八木前(笹井) 八木上(笹井) 揚櫃木(上奥富)	<ul style="list-style-type: none"> 集落が大きくなる 環状集落が出現する
5000年前	中期	五領ヶ台式 勝坂式・阿玉台式 加曾利E式 連弧文系 I II	丸山(柏原) 宮地(笹井) 今宿(上広瀬)	<ul style="list-style-type: none"> この頃、土偶が盛んにつくられる 長期定住化が進む
		III IV	字尻(柏原) 揚櫃木(上奥富) 森ノ上(柏原)	<ul style="list-style-type: none"> 集落の規模が小さくなる
4000年前	後期	称名寺式 堀之内式 加曾利B式	字尻(柏原) 高根(柏原)	<ul style="list-style-type: none"> 集落が低地にうつる 狭山市では、遺跡がなくなる
3000年前	晩期	式行 式洞 式安 式大 式千		<ul style="list-style-type: none"> この頃、気候が寒冷化する

市内遺跡分布図

狭山市は、埼玉県の西南部に位置し、市の中央やや北西寄りには、南西から北東にかけて入間川が流れています。その入間川を中心に右岸を武蔵野台地、左岸を入間台地と呼びます。この2つの台地上には、旧石器時代の遺跡に始まり、奈良・平安時代までの遺跡が分布しており、特に生活条件の良い左岸沿いには帯状に連なって遺跡が分布しています。残念なことに、弥生時代の遺跡は、いまだ確認されていませんが、これまでに67遺跡が確認されています。

現在、国道16号沿い柏原新狭山線の都市計画道路建設に伴い、下奥富地区内で発掘調査が行われています。



展示資料出土地

- 大井町・亀居遺跡
- 浦和市・明花向遺跡
- 上尾市・在家遺跡
- 鴻巣市・中三谷遺跡
- 寄居町・塚屋遺跡
- 川里村・赤城遺跡
- 花園町・宮林遺跡
- 日高市・東原遺跡



- 旧石器時代の遺跡
- 縄文時代の遺跡
- 丸山遺跡

市内遺跡分布図名称

- | | | | | | | | | | | | | | |
|-------------|----------|----------|-------------|-------------|----------|-----------|-----------|-----------|-----------|------------|----------|----------|-----------|
| 14 上広瀬古墳群 | 13 今宿遺跡 | 12 霞ヶ丘遺跡 | 11 上広瀬上ノ原遺跡 | 10 金井上遺跡 | 9 金井遺跡 | 8 宮地遺跡 | 7 沢口遺跡 | 6 笹井古墳群 | 5 沢口上古墳 | 4 八木上遺跡 | 3 八木北遺跡 | 2 八木遺跡 | 1 東八木窯跡群 |
| 28 上の原東遺跡 | 27 鶴田遺跡 | 26 金井林遺跡 | 25 丸山遺跡 | 24 字尻遺跡 | 23 宮ノ越遺跡 | 22 城ノ越遺跡 | 21 英遺跡 | 20 御所の内遺跡 | 19 小山ノ上遺跡 | 18 鳥ノ上遺跡 | 17 富士塚遺跡 | 16 森ノ上遺跡 | 15 森ノ上西遺跡 |
| 42 滝祇園遺跡 | 41 上諏訪遺跡 | 40 西久保遺跡 | 39 東久保遺跡 | 38 上広瀬西久保遺跡 | 37 上双木遺跡 | 36 下双木遺跡 | 35 宮原遺跡 | 34 町久保遺跡 | 33 高根遺跡 | 32 前山遺跡 | 31 稲荷山遺跡 | 30 半貴山遺跡 | 29 上の原西遺跡 |
| 56 稲荷山公園古墳群 | 55 台遺跡 | 54 下向遺跡 | 53 吉原遺跡 | 52 下向沢遺跡 | 51 沢久保遺跡 | 50 沢台遺跡 | 49 中原遺跡 | 48 上中原遺跡 | 47 稲荷上遺跡 | 46 坂上遺跡 | 45 揚榎木遺跡 | 44 戸張遺跡 | 43 峰遺跡 |
| 67 堀難井遺跡 | 66 八木前遺跡 | 65 八軒家の井 | 64 堀兼之井 | 63 七曲井 | 62 町屋道遺跡 | 61 富士見南遺跡 | 60 富士見北遺跡 | 59 富士見西遺跡 | 58 石無坂遺跡 | 57 稲荷山公園遺跡 | | | |

参考文献

- 岡本 勇編『縄文土器大成1』講談社 1982年
永峰光一編『縄文土器大成2』講談社 1981年
野口義麿編『縄文土器大成3』講談社 1981年
宮内正勝編『原始の人びととくらし』あすなろ書房 1992年
芹沢長介著『日本陶磁大系1・縄文』平凡社 1990年
鈴木公雄編『古代史復元2 縄文人の生活と文化』講談社 1991年
小林達雄編『古代史復元3 縄文人の道具』講談社 1991年
佐々木高明著『日本史誕生』集英社 1991年
狭山市『狭山市史 原始・古代資料編』狭山市 1986年
藤村東男著『縄文土器の知識II 中・後・晩期』東京美術 1984年
大場磐雄・内藤政恒・八幡一郎編『考古学講座第3巻 先史文化』雄山閣 1969年
安田喜憲著『環境考古学事始』日本放送出版協会 1980年
大塚初重・戸沢充則・佐原 眞編『日本考古学を学ぶ(1)~(3)』有斐閣 1988年
栃木県なす風土記の丘資料館『豊かな恵みの中で一なすの縄文人一』1995年
島根県立八雲立つ風土記の丘資料館『再現！縄文の世界』1995年
八千代市歴史民俗資料館『縄文時代の技と祈り』1995年
浦和市立郷土博物館『浦和市出土品百選』1995年
仙台市博物館『仙台の縄文土器』1995年
大井町立郷土資料館『縄文の風景』1995年
調布市郷土博物館『縄文土器・それぞれの顔』1993年
なお、各遺跡の詳細については、調査報告書を参考にした。

協力者一覧（敬称略・順不同）

埼玉県立埋蔵文化財センター 大井町郷土資料館 浦和市郷土博物館 富士見市立考古館 日高市教育委員会 大井町教育委員会 飯能市郷土館 宮代町郷土資料館

出土品展 — 狭山の縄文時代 —

発 行 平成 8 年 3 月 23 日

編集・発行 狭山市立博物館

〒 350-13 埼玉県狭山市稲荷山 1-23-1

TEL 0429-55-3804

FAX 0429-55-3811

印刷・製本 光版社印刷株式会社



陝山市立博物館